

## この15年で幼児の生活や 保護者の意識はどのように 変化してきたのだろうか

首都圏の乳幼児をもつ約3,500名の保護者の方にご協力いただき、幼児の生活の様子、保護者の子育てに対する意識や実態を調査しました。

1995年、2000年、2005年に実施した過去3回の調査結果と比較することで、15年間の変化を把握できる貴重な資料となっています。この速報版では、調査結果の中からとくに注目したいデータを抜粋してご紹介します。

### 第4回

# 幼児の生活 アンケート

乳幼児をもつ保護者を対象に

1995  
↑  
2000  
↑  
2005  
↑  
2010



# 調査概要

## 調査テーマ

乳幼児の生活の様子、保護者の子育てに関する意識と実態

## 調査方法

郵送法(自記式アンケートを郵送により配布・回収)

## 調査時期

第1回調査 1995年2月  
 第2回調査 2000年2月  
 第3回調査 2005年3月  
 第4回調査 2010年3月

## 調査対象

**第1回調査(95年)**  
 首都圏(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県)の1歳6か月～6歳就学前の幼児をもつ保護者1,692名(配布数3,020通、回収率56.0%)

## 第2回調査(00年)

首都圏(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県)、および地方都市(富山市、大分市)の1歳6か月～6歳就学前の幼児をもつ保護者3,270名(配布数5,600通、回収率58.4%)

\*経年での比較を行うために、地方都市の回答を分析から除外している。

## 第3回調査(05年)

首都圏(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県)の0歳6か月～6歳就学前の乳幼児をもつ保護者2,980名(配布数7,200通、回収率41.4%)

## 第4回調査(10年)

首都圏(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県)の0歳6か月～6歳就学前の乳幼児をもつ保護者3,522名(配布数7,801通、回収率45.1%)

## 調査項目

子どもの基本的な生活時間/習い事/メディアとのかかわり/遊び/母親の教育観・子育て観/子どもの将来への期待/今、子育てで力を入れていること/母親の子育て意識/父親の家事・育児参加/子育て支援など

\*調査項目は経年比較が可能なように配慮したが、時代の変化にあわせて、追加・削除などの変更を行っている。

## 分析枠組みとサンプル数

本速報版での分析対象は、1歳6か月以上

経年調査	調査年	年齢 性別	0歳児			1歳児			2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児	分析対象 サンプル数
			※1	※2	※3	月齢不明	1歳前半	1歳後半						
第1回	95年	男	-	-	-	57	226	154	182	110	90	1,692		
		女	-	-	-	71	233	152	206	108	103			
第2回	00年	男	-	-	-	91	246	123	128	125	130	1,601		
		女	-	-	-	84	235	128	98	105	108			
第3回	05年	男	161	12	170	152	374	164	162	152	143	2,297		
		女	165	11	164	151	366	176	150	174	133			
第4回	10年	男	150	-	132	143	245	271	291	243	264	2,918		
		女	172	-	150	127	247	276	288	265	258			

※1:0歳6か月～0歳11か月 ※2:1歳0か月～1歳5か月 ※3:1歳6か月～1歳11か月

- ◆本速報版では、1歳6か月以上の幼児をもつ保護者の回答のみを分析している。
- ◆データの精度を高め、経年での比較を可能にするため、比推定を用い、調査対象の属性別構成比を現実にあわせた。比推定で用いるウェイトは、子どもの性別(2区分)×子どもの年齢別(6区分)の12区分に分割して、4都県の人口推計に基づいて作成した。本速報版の百分率(%)は、このウェイトをつけて算出されている。なお、サンプル数はウェイトをつける前の数を示している。

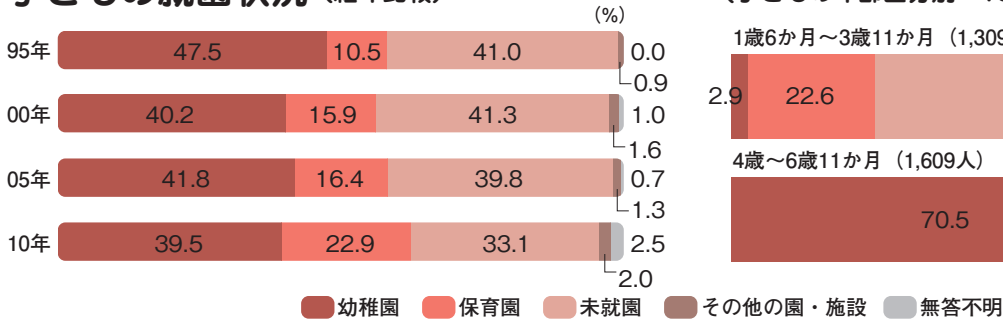
※東アジア5都市における調査は、「幼児の生活アンケート・東アジア5都市調査」速報版(2010年11月刊行予定)にて報告。

※国内調査全体の詳細な分析は、『第4回幼児の生活アンケート報告書』(2011年3月刊行予定)にて報告。

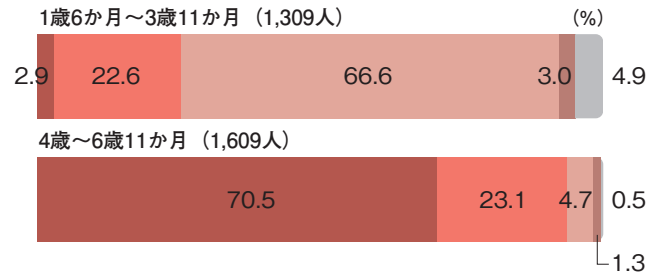
# 基本属性



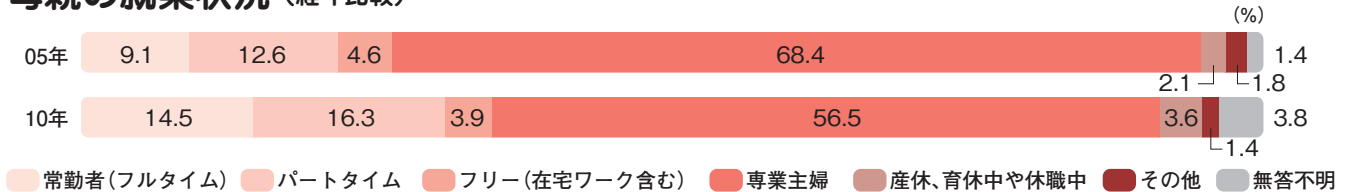
## 子どもの就園状況 (経年比較)



## (子どもの年齢区分別 10年)



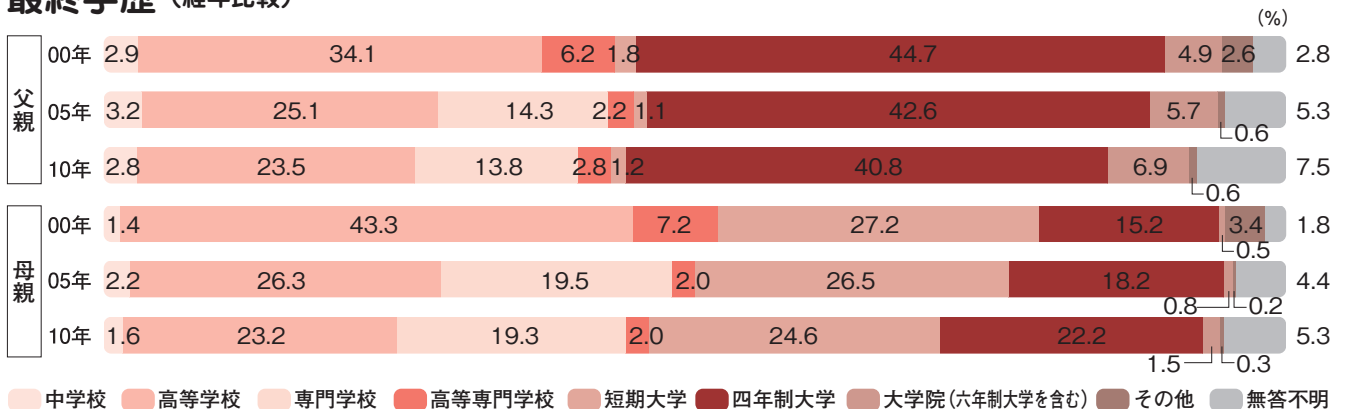
## 母親の就業状況 (経年比較)



## 平均年齢 (経年比較)



## 最終学歴 (経年比較)



## 参考資料：時代環境年表(1990年～2010年)

※第1回調査の1995年から第4回調査の2010年に至るまでの、主な社会的な出来事を取り上げた。

年	出生率・人口、乳幼児関連	社会一般
1990～1995年	90 「1.57ショック」 94 エンゼルプラン	91 バブル崩壊 95 阪神淡路大震災 地下鉄サリン事件
1996～2000年	97 男女雇用機会均等法改正 98 幼稚園教育要領告示 99 男女共同参画社会基本法改正 新エンゼルプラン	97 山一証券など大型倒産の続出
2001～2005年	03 次世代育成支援対策推進法 少子化社会対策基本法	01 第1次小泉内閣発足 米国で同時多発テロ
2006～2010年	08 新しい幼稚園教育要領告示 改定保育所保育指針告示	07 サブプライムローン問題 2007年問題(団塊世代の大量定年退職) 08 世界金融危機 09 政権交代

# 1

## 幼児の生活

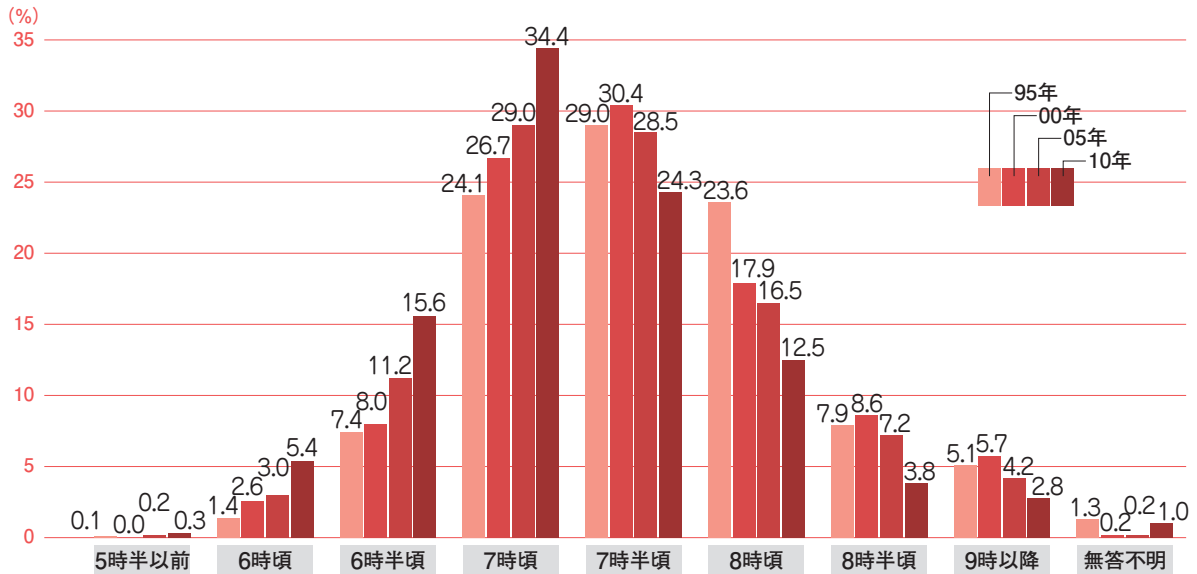
### 早寝早起きの傾向がますます強まった

5年前に明らかになった幼児の早寝早起きがさらに進行した。10年調査では「7時頃」以前に起床する幼児が半数を超え、とくに早起きの傾向が強まった。「22時頃」以降に就寝する比率も減少し、15年間でもっとも早寝早起きとなった。

#### Q

お子様は平日、何時頃に起きますか。

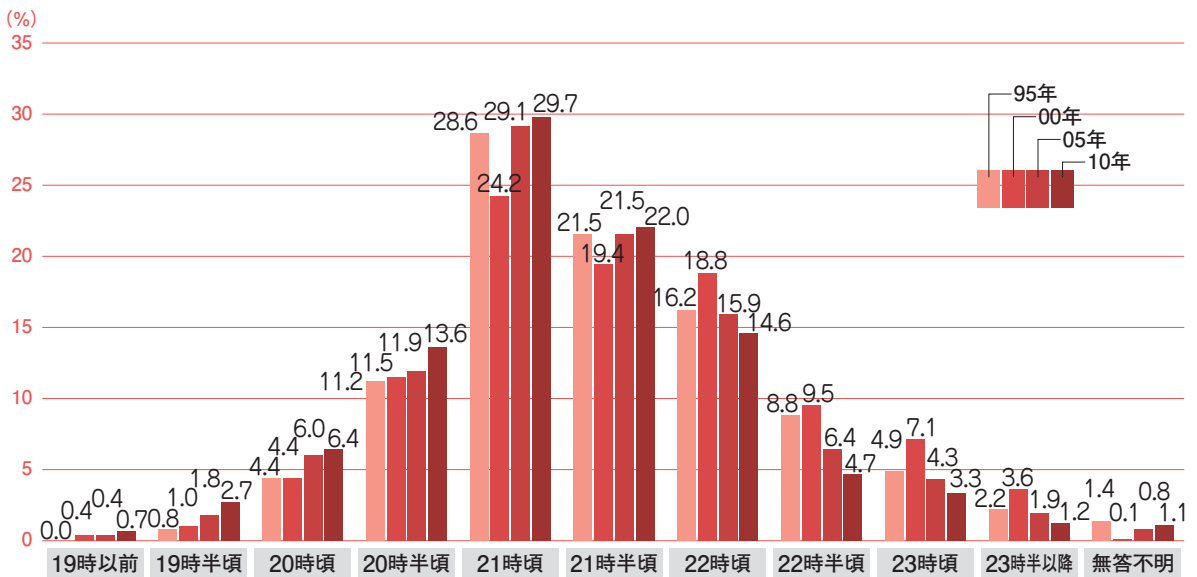
図1-1-1 平日の起床時刻(経年比較)



#### Q

夜、何時頃に寝ますか。

図1-1-2 平日の就寝時刻(経年比較)



「7時頃」以前に起床する比率をみると、95年33.0%→00年37.3%→05年43.4%→10年55.7%となっており、15年前から22.7ポイント、5年前から12.3ポイント増加した(図1-1-1)。また「22時頃」以降に就寝する比率をみると、95年32.1%→00年39.0%→05年28.5%→10年23.8%となっ

おり、5年前から4.7ポイント減少した(図1-1-2)。5年前の調査では、幼児が早寝になり夜型化が止まった傾向がみられたが、今回はとくに早起きが進行している。また、それともなって朝食、夕食の時間が早まっていることもわかった(図表省略)。

## 年齢・就園状況によって睡眠の取り方が異なる

保育園児は、どの年齢においても未就園児や幼稚園児より夜間の睡眠時間が短い。一方で、保育園児のほうが、昼寝時間が長いので、未就園児や幼稚園児との1日の合計睡眠時間の差は少ないことがわかった。

**Q** お子様は平日、何時頃に起きますか。／どれくらい昼寝をしますか。／夜、何時頃に寝ますか。

図1-2-1 平均就寝・起床時刻と平均夜間睡眠時間(経年比較)

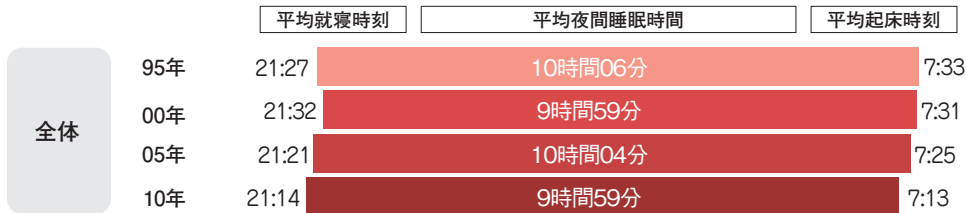
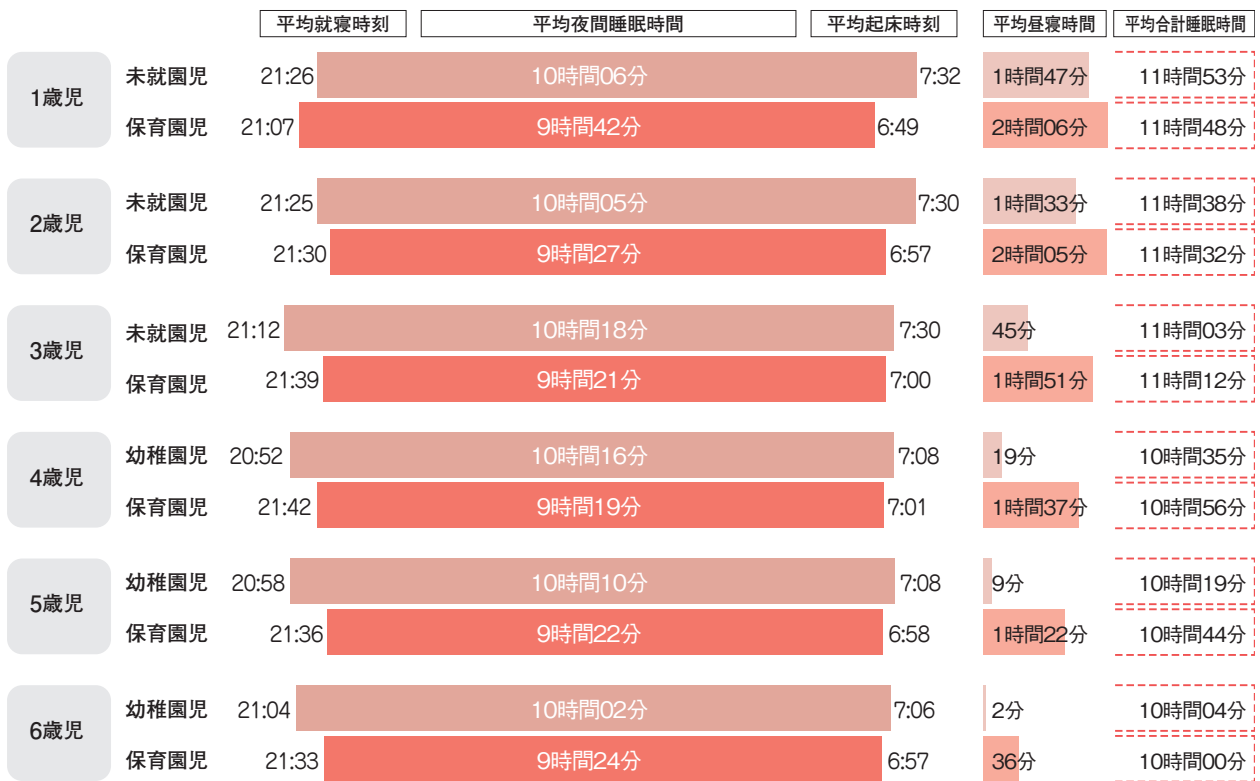


図1-2-2 平均就寝・起床時刻と平均合計睡眠時間(子どもの年齢別 就園状況別 10年)



※1歳児は、1歳6か月～1歳11か月。  
 ※95年、00年、05年調査は、起床時刻、就寝時刻のいずれか、10年調査は、起床時刻、就寝時刻、昼寝時間のいずれかの質問に対して無答不明のあった人は分析から除外している。  
 ※平均就寝時刻と平均起床時刻は「21時頃」を21時、「23時半以降」を23時30分のように置き換えて算出した。また、平均夜間睡眠時間は、平均就寝時刻と平均起床時刻から算出した。  
 ※平均昼寝時間は「3時間より多い」を3時間30分、「昼寝はしない」を0分のように置き換えて算出した。  
 ※平均合計睡眠時間は、平均夜間睡眠時間と平均昼寝時間から算出した。

15年間で比較すると、10年調査が就寝・起床時刻ともっとも早いのが、夜間睡眠時間に大きな変化はみられなかった(図1-2-1)。就園状況別にみると、幼稚園児がもっとも早寝であり、未就園児や幼稚園児は10時間以上の夜間睡眠をとっていた。一方、保育園児の夜間睡眠時間は

9時間台にとどまるものの、未就園児や幼稚園児よりも昼寝時間が長く、とくに3～5歳児では1時間以上の差があった。子どもの年齢別にみると、年齢があがるごとに合計睡眠時間は減少し、6歳児になると就学を見据えてか、昼寝を減らす傾向がうかがえる(図1-2-2)。

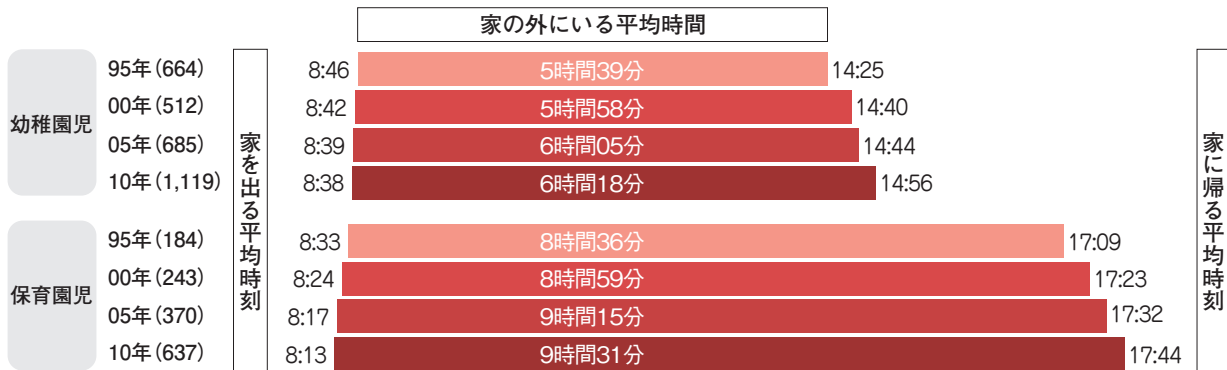
## 幼稚園児も保育園児も、家に帰る時刻が遅くなっている

10年調査までの15年間で、幼稚園児・保育園児ともに、園に向けて家を出る時刻が早くなり、家に帰る時刻は遅くなっている。園に対しては、5年前と比べて、幼稚園児の母親はより「知的教育」を、保育園児の母親はより「保育終了後のおけいこ事」「自由な遊び」を要望する傾向がみられる。



幼稚園・保育園に行くために何時頃、家を出ますか。／幼稚園・保育園から何時頃、帰宅しますか。

図1-3-1 家を出る・家に帰る平均時刻と家の外にいる平均時間(就園状況別 経年比較)



※子どもを園に通わせている人のみ回答。

※家を出る時刻、家に帰る時刻のいずれかの質問に対して無答不明のあった人は、分析から除外している。

※95年調査は、「18時以降」を18時30分、00年調査以降は、「18時頃」を18時、「18時半頃」を18時30分、「19時以降」を19時と置き換えて算出した。

※家の外にいる平均時間は、家を出る平均時刻と家に帰る平均時刻から算出した。

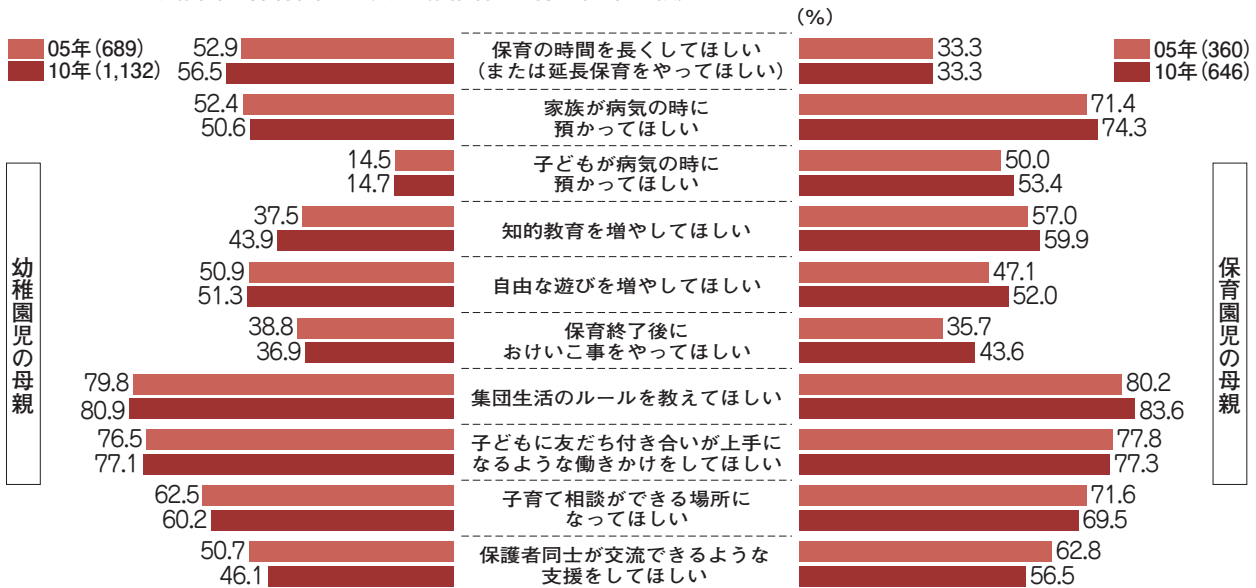


現在通っている幼稚園・保育園について、あなたは次のことをどう思いますか。



母親のみ回答

図1-3-2 幼稚園・保育園への要望(就園状況別 経年比較)



※「とてもそう思う+まあそう思う」の%。 ※母親の回答のみ分析。

※子どもを園に通わせている人のみ回答。

家を出てから家に帰るまでの平均時間を5年前と比べると、幼稚園児は6時間05分から6時間18分に、保育園児は9時間15分から9時間31分になった。家の外にいる時間は、10年調査までの15年間で、幼稚園児は39分、保育園児は55分増加しており、家で過ごす時間が短くなっていると推察される(図1-3-1)。園への要望についてたずねた10項目

のうち、5年前と比べて5ポイント程度、またはそれ以上に増加したのは、幼稚園児の母親は「知的教育を増やしてほしい」(6.4ポイント)、保育園児の母親は「自由な遊びを増やしてほしい」(4.9ポイント)、「保育終了後におけいこ事やしてほしい」(7.9ポイント)である(図1-3-2)。

## よくする遊びは15年前から変わらない

15年間をみると、1位「公園の遊具(すべりだい、ブランコなど)を使った遊び」と、2位「つみ木、ブロック」の上位2項目に変化はない。また半数近くの幼児が「人形遊び、ままごとなどのごっこ遊び」「砂場などでのどろんこ遊び」をしていることも変わらない。これらは長く幼児に支持されている代表的な遊びといえるだろう。

### Q お子様はどのような遊びをよくしていますか。

図1-4-1 遊びの種類(経年比較/就園状況別(高年齢) 10年)

(子どもの就園状況別(高年齢) 10年)(%)

	(%)				幼稚園児 (1,121)	<	保育園児 (376)
	95年	00年	05年	10年			
公園の遊具(すべりだい、ブランコなど)を使った遊び	66.0 ①	68.4 ①	76.1 ①	78.1 ①	71.7	<	78.8
つみ木、ブロック	55.0 ②	55.5 ②	63.1 ②	68.0 ②	56.6	<	64.3
人形遊び、ままごとなどのごっこ遊び	51.2 ③	53.5 ③	56.9 ⑤	56.6 ③	52.3		52.4
砂場などでのどろんこ遊び	49.5 ④	52.0 ④	57.6 ③	53.6 ④	47.7		48.6
絵やマンガを描く	45.0	43.6	57.5 ④	53.5 ⑤	61.7		65.6
自転車、一輪車、三輪車などを使った遊び	46.3 ⑤	51.5 ⑤	53.9	49.5	60.8		56.0
ボールを使った遊び(サッカーや野球など)	35.0	33.2	46.8	46.9	44.8		46.9
ミニカー、プラモデルなど、おもちゃを使った遊び	39.5	43.8	45.5	46.1	38.8	>	33.0
マンガや本(絵本)を読む	30.4	28.1	44.9	44.5	42.7		46.5
石ころや木の枝など自然のものを使った遊び	26.2	33.8	37.6	40.2	37.5		35.7
ジグソーパズル	21.9	17.9	28.8	32.9	30.6	<	43.3
カードゲームやトランプなどを使った遊び	19.4	17.8	26.2	25.6	42.1		40.4
おにごっこ、缶けりなどの遊び	13.9	13.6	20.9	23.0	33.1	<	42.6
なわとび、ゴムとび	14.1	12.6	19.3	21.1	37.6		33.7
*携帯ゲーム	—	—	—	17.8	29.4	>	22.6
テレビゲーム	24.2	20.2	15.1	17.0	29.3	>	22.6
その他	7.2	9.2	13.2	10.1	11.6		10.5

※複数回答。

※各調査年のそれぞれ上位5位までを、○のついた数字で示した。

※<>は子どもの就園状況別(高年齢)にみたときに、5ポイント以上差がみられた項目。

※調査時点における子どもの就園状況は以下のとおりである。

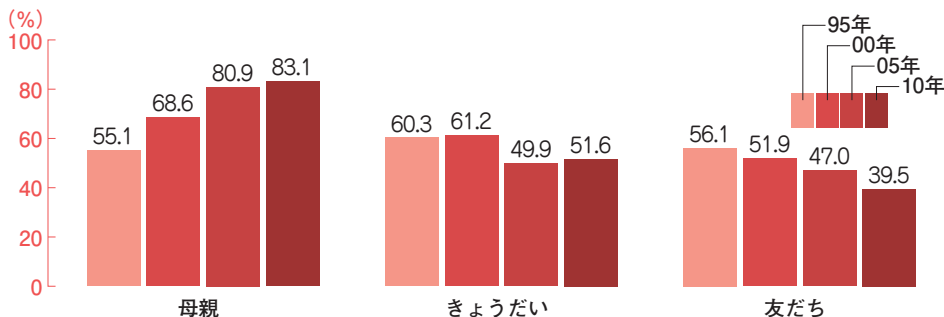
幼稚園児(高年齢)：4歳～6歳11か月の幼稚園に通っている幼児。保育園児(高年齢)：4歳～6歳11か月の保育園に通っている幼児。

※「\*携帯ゲーム」は10年だけの項目。

※項目は10年調査結果の降順に図示。

### Q 平日、(幼稚園・保育園以外で)遊ぶ時は誰と一緒に遊ぶことが多いですか。

図1-4-2 一緒に遊ぶ人(経年比較)



※複数回答。 ※「その他」を含む9項目の中から、上位3項目を図示。

いくつかの遊びについて、就園状況別で差がみられた。屋内での遊びでは、幼稚園児は「ミニカー、プラモデル」、「携帯ゲーム」、「テレビゲーム」の比率が高いのに対し、保育園児は「つみ木、ブロック」、「ジグソーパズル」の比率が高かった。屋外での遊びでは、保育園児が「公園の遊具(すべりだい、ブランコなど)を使った遊び」、「おにごっこ、缶

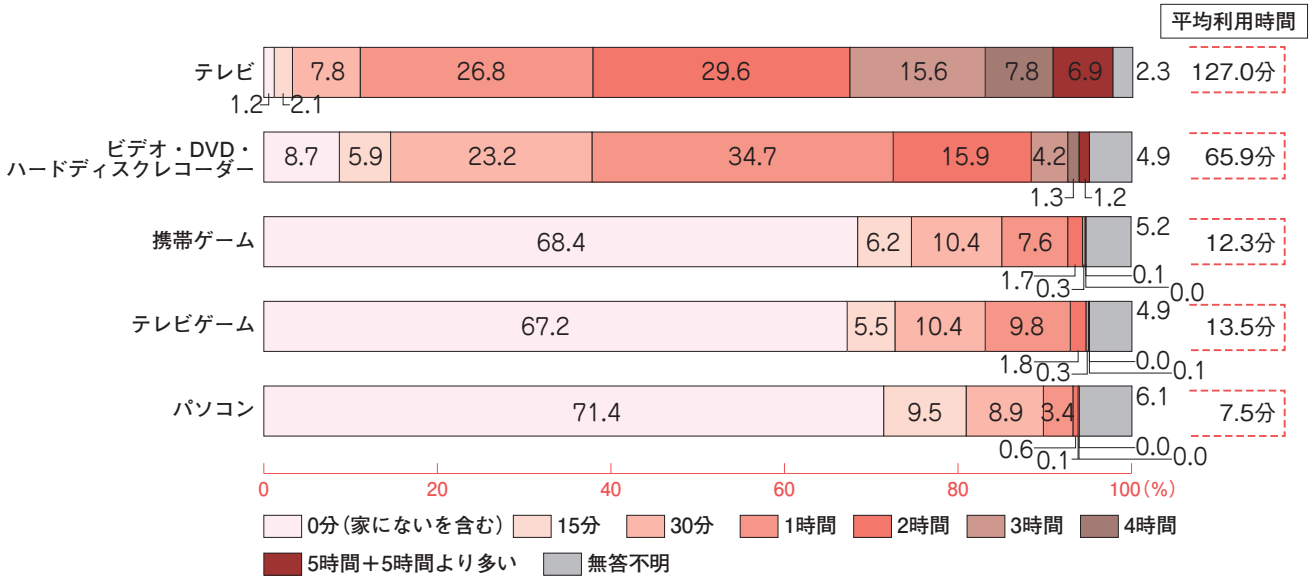
けりなどの遊び」の比率が高かった(図1-4-1)。また幼稚園や保育園以外で一緒に遊ぶ人は、「母親」が増加する一方、「友だち」は減少している。とくに「友だち」は5年前から7.5ポイント減少しており、友だちと遊ぶ機会が減っていることがわかった(図1-4-2)。

## 6歳児の約半数は、テレビゲームを一人で操作できる

テレビを1日2時間以上見ている幼児は約6割、ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダーでは約2割である。幼児が一人で操作できる割合は、6歳児ではビデオ・DVD・ハードディスクレコーダーで64.7%、テレビゲームで47.7%とおよそ半数である。

**Q** お子様は、次のものを1日あたりどれくらいの時間、使ったり、見たりしますか。

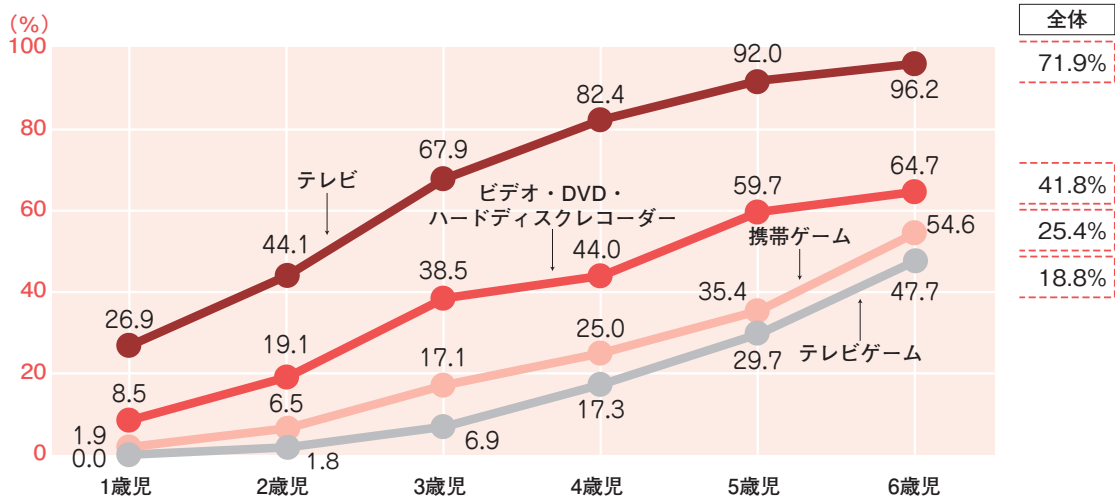
図1-5-1 電子メディアの1日あたりの利用時間(10年)



※平均利用時間は、「0分(家にないを含む)」を0分、「5時間」を300分、「5時間より多い」を360分のように置き換えて算出した。無答不明の人は、分析から除外している。

**Q** お子様は、次のものを自分1人で操作できますか。

図1-5-2 電子メディアを一人で操作できる比率(子どもの年齢別 10年)



※複数回答。  
※1歳児は、1歳6か月～1歳11か月。

テレビの1日の視聴時間は、「2時間」がもっとも多く約3割である。ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダー(以下、ビデオ・DVD・HDRと表示)では、「1時間」がもっとも多く34.7%である。携帯ゲーム、テレビゲーム、パソコンは、「0分(家にないを含む)」がいずれも約7割を占めている(図1

図1-5-1)。子どもが一人で操作できる割合は、3歳児ではテレビで67.9%、ビデオ・DVD・HDRで38.5%。6歳児では、ビデオ・DVD・HDRで64.7%、テレビゲームでは47.7%である(図1-5-2)。



## 習い事をしている比率が、5年前に比べて減少している

習い事をしている比率は、05年調査に比べて約10ポイント減少し、47.4%であった。1～6歳児のいずれの年齢でも減っている。習い事の種類でもっとも減少したのは「英会話などの語学の教室」で、14.2%から9.1%に5.1ポイント減っている。



お子様は現在、習い事・おけいこ事をしていますか。  
(幼稚園・保育園で有料で習っているものや、塾・通信教育を含みます)

図1-6-1 習い事をしている比率(経年比較)

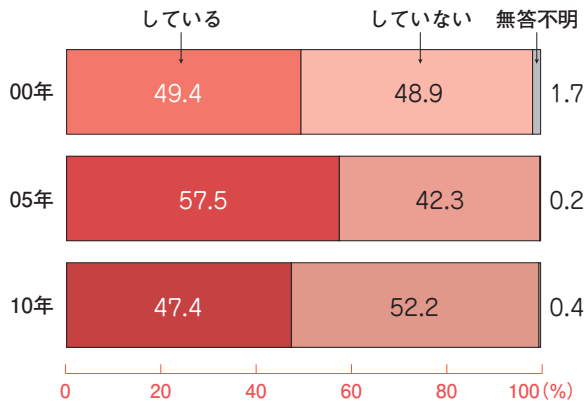
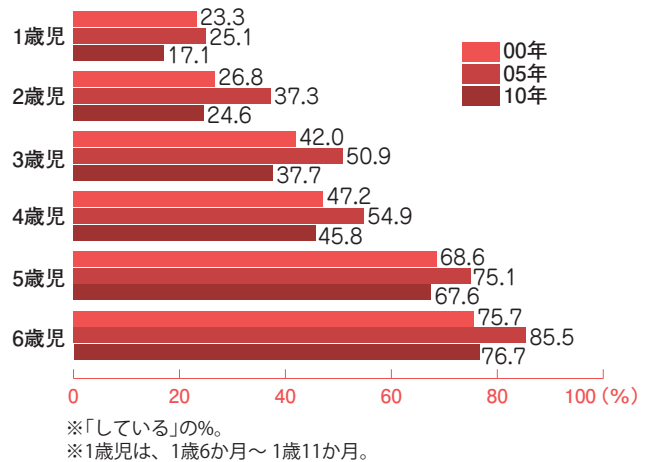
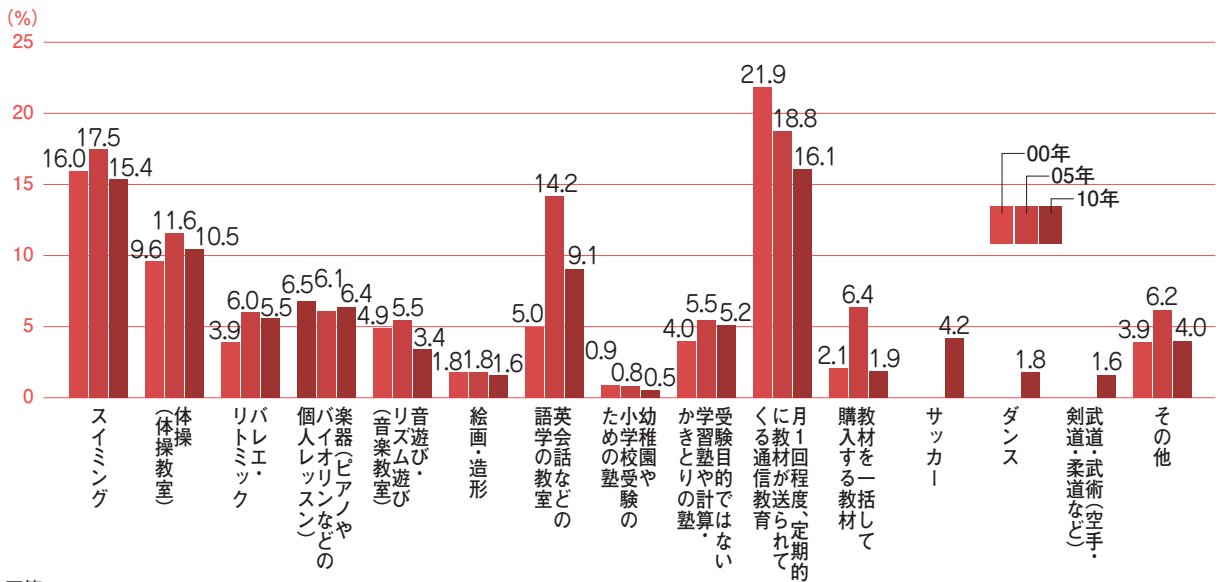


図1-6-2 習い事をしている比率(子どもの年齢別 経年比較)



どのような習い事・おけいこ事をしていますか。

図1-6-3 習い事の種類(経年比較)



※複数回答。

※現在、習い事をしていないと回答した保護者を含めたすべての保護者の回答を母数としている。

※10年調査は、「幼稚園・保育園で有料で習っているもの(保育時間中に習っているものは除く)」と「幼稚園・保育園以外で習っているもの」とに分けて、習い事の種類をたずねた。そのため、ここでは少なくともどちらか一方で、習っていると回答した比率を示した。なお、00年調査、05年調査は、どこで習っているかを分けてたずねていない。

※10年調査で項目名を変更した。05年調査までは「スイミングスクール」→10年調査は「スイミング」、同様に「スポーツクラブ・体操教室」→「体操(体操教室)」、「絵画の教室」→「絵画・造形」、「幼児向けの音楽教室」→「音遊び・リズム遊び(音楽教室)」、「バレエ・リトミック」→「バレエ」「リトミック」(集計は経年比較するために合算)。「サッカー」「ダンス」「武道・武術(空手・剣道・柔道など)」は10年調査のみの項目。

習い事に通ったり通信教育などを行っている比率は、05年調査の57.5%から10.1ポイント減少し、10年調査では、47.4%と半数を下回った(図1-6-1)。年齢別にみると、05年調査よりいずれの年齢でも減少しているが、2、

3歳児はそれぞれ10ポイント以上と、大きく減っている(図1-6-2)。習い事の種類別にみると、とくに「英会話などの語学の教室」が5.1ポイント減少している(図1-6-3)。

# 2

## 母親の意識

### 子育てへの不安感や否定的な感情は、5年前に比べて減少傾向

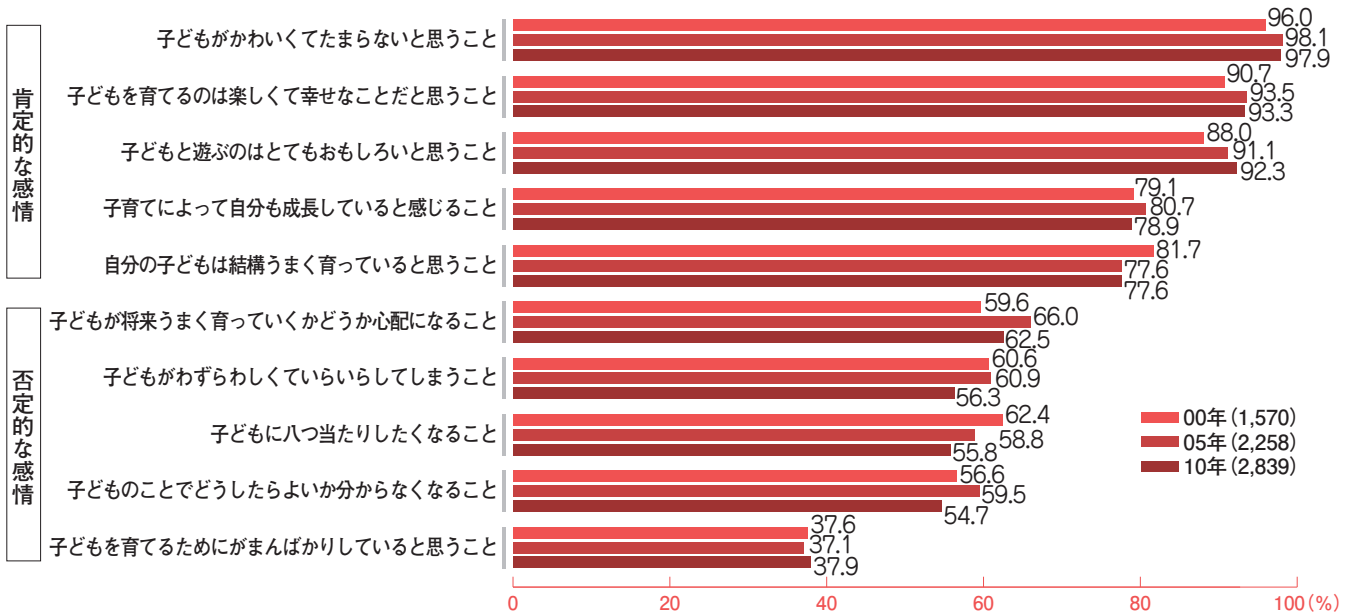
8～9割の母親が、子育てに対して肯定的な感情をもっていることは、5年前から変わらない。そして、子育てに対する否定的な感情や子どもの将来への心配は、全体では5年前と比べて減少傾向にあり、母親の就業状況別でみると、常勤者では増加、専業主婦では減少傾向にある。

**Q** あなたは最近、子育てについて次のようなことをお感じになることがありますか。



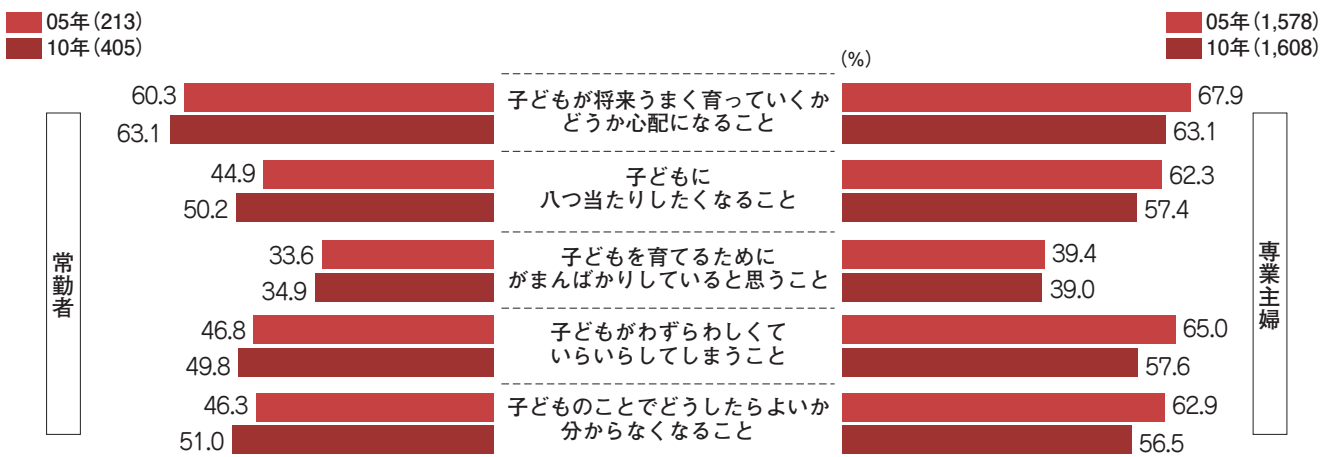
母親のみの回答

図2-1-1 母親の子育て意識(経年比較)



※「よくある+ときどきある」の%。  
※母親の回答のみ分析。

図2-1-2 母親の子育て意識(母親の就業状況別 経年比較)



※「よくある+ときどきある」の%。  
※母親の回答のみ分析。  
※10項目の中から、子育てへの不安感や否定的な感情を示す5項目を図示。

子育てへの不安感や否定的な感情を示す各項目について、常勤者と専業主婦が「よくある+ときどきある」と答えた比率を比べると、05年も10年も専業主婦は、常勤者を上回る項目が多く、専業主婦のほうが常勤者より子育てに対する不安を抱えていることがわかった。一方、5年前と比べ

ると、子育てへの不安感や否定的な感情を示す各項目に「よくある+ときどきある」と答えた比率は、専業主婦が減少傾向にあるのに対し、常勤者は増加傾向にあった(図2-1-2)。母親の就業状況によって、子育てへの不安感や否定的な感情の変化に違いがみられるようである。

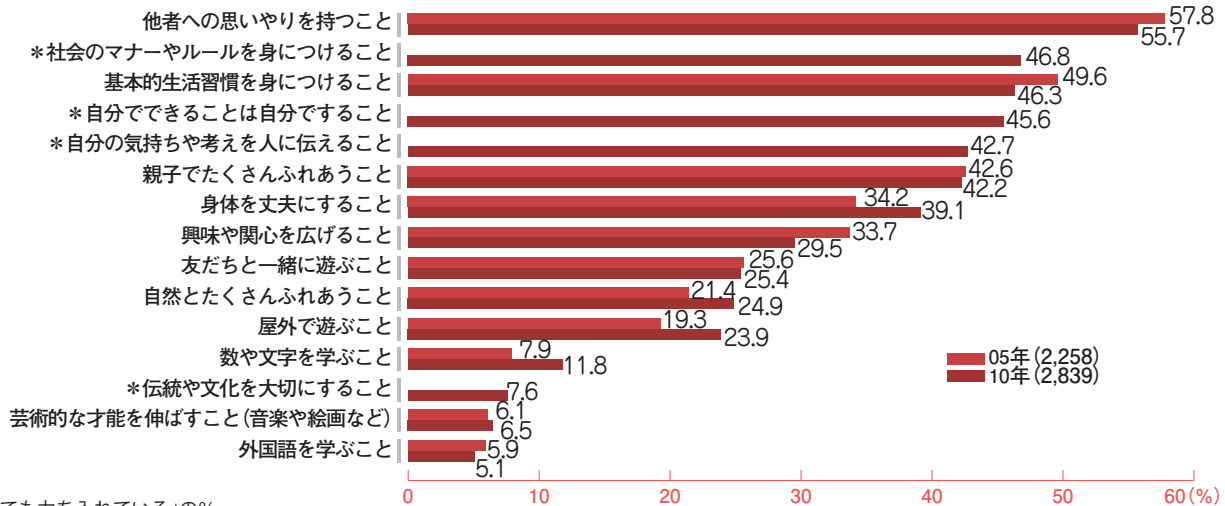
## 子育てでは、人間関係づくりや社会・生活ルールの習得を重視

多くの母親が、人間関係づくりや社会・生活ルールの習得を重視して子育てをしている。5年前と比べると、比率は少ないが、文字や数の学習と、屋外での遊びや身体づくりをより重視する傾向がみられた。

**Q** あなたは、どのようなことに力を入れて、お子様を育てていますか。



図2-2-1 子育てで力を入れていること(経年比較)

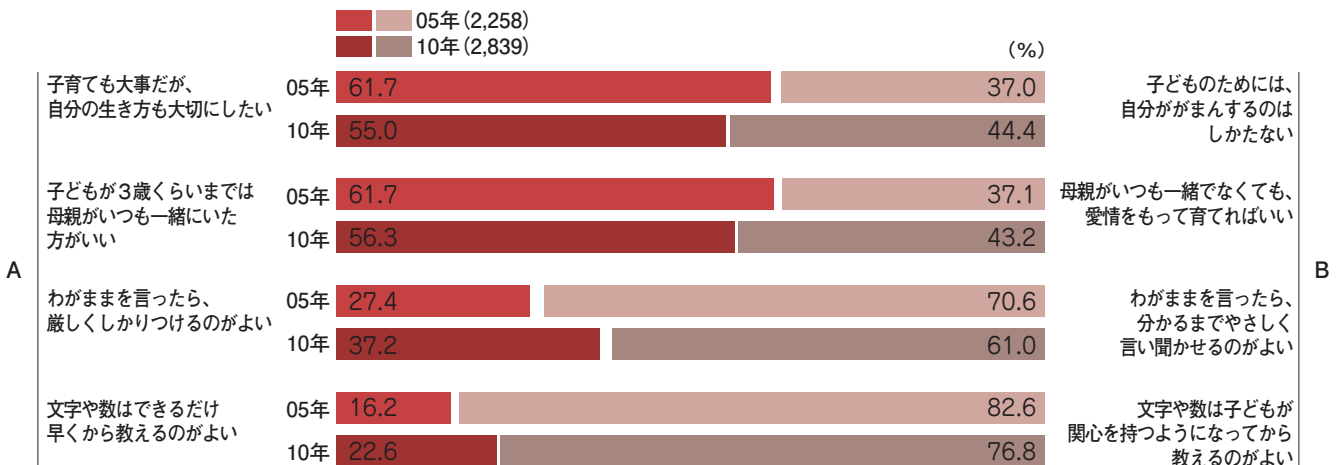


※「とてもし力を入れている」の%。  
 ※母親の回答のみ分析。  
 ※「\*のある項目」は10年調査のみの項目。

**Q** 子育てに関するAとBの2つの意見のうち、あなたのお気持ちに近いほうはどちらですか。どちらかといえば近いほうの意見に○をつけてください。



図2-2-2 母親の子育て観(経年比較)



※母親の回答のみ分析。  
 ※無答不明があるため、Aの意見とBの意見の数値を合計しても100%にはならない。  
 ※8項目の中から、05年調査と10年調査を比較し、5ポイント以上の差があった4項目を图示。

子育てで力を入れていることをたずねたところ、「とてもし力を入れている」と答えた比率がもっとも高かったのは、5年前と同様、「他者への思いやりを持つこと」だった(図2-2-1)。また、母親の子育て観については、5年前と比べ、「母親がいつも一緒になくても、愛情をもって育てればいい」と答えた比率が増加し、子どもと一緒にいる時間

の長さにこだわらなくなってきた傾向がうかがえる。また、いずれも少数派の意見ではあったが、「子どものためには、自分ががまんするのはしかたない」「わがママを言ったら、厳しくしかりつけるのがよい」「文字や数はできるだけ早くから教えるのがよい」と答えた比率が増加した(図2-2-2)。

## 女子に対して四年制大学への進学を期待する比率が、5年前に比べて増加

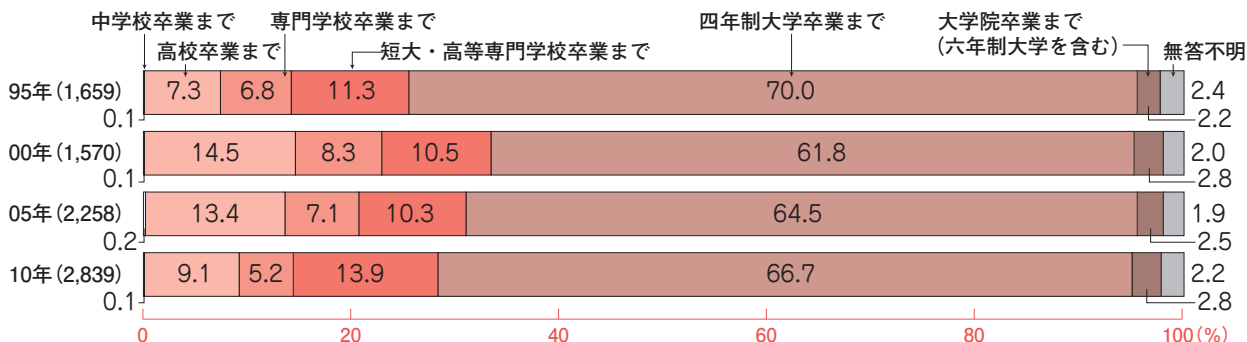
子どもの進学期待について「四年制大学卒業まで」と答えた比率は、5年前に引き続き今回も若干増加した。子どもの性別でみると、男子はほとんど変化がなく、女子で増加した。

**Q** 現在、お子様をどの程度まで進学させたいとお考えですか。



母親のみの回答

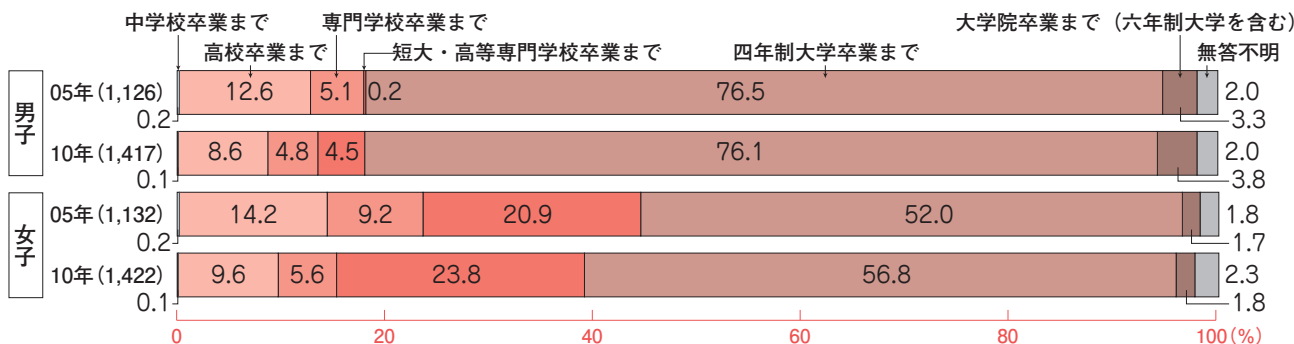
図2-3-1 子どもの進学に対する期待(経年比較)



※母親の回答のみ分析。

※95年、00年、05年調査では、「短大・高等専門学校卒業まで」は「短大卒業まで」、「四年制大学卒業まで」は「大学卒業まで」、「大学院卒業まで(六年制大学を含む)」は「大学院卒業まで」とたずねた。

図2-3-2 子どもの進学に対する期待(子どもの性別 経年比較)



※母親の回答のみ分析。

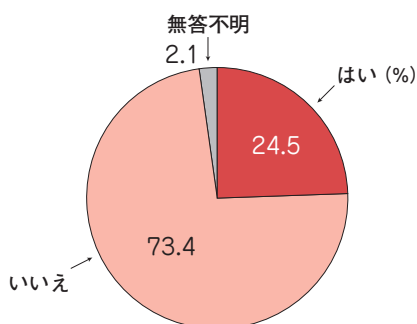
※95年、00年、05年調査では、「短大・高等専門学校卒業まで」は「短大卒業まで」、「四年制大学卒業まで」は「大学卒業まで」、「大学院卒業まで(六年制大学を含む)」は「大学院卒業まで」とたずねた。

**Q** お子様を将来、留学させたいとお考えですか。



母親のみの回答

図2-3-3 子どもの留学に対する期待(10年)



※母親の回答のみ分析(2,839)。

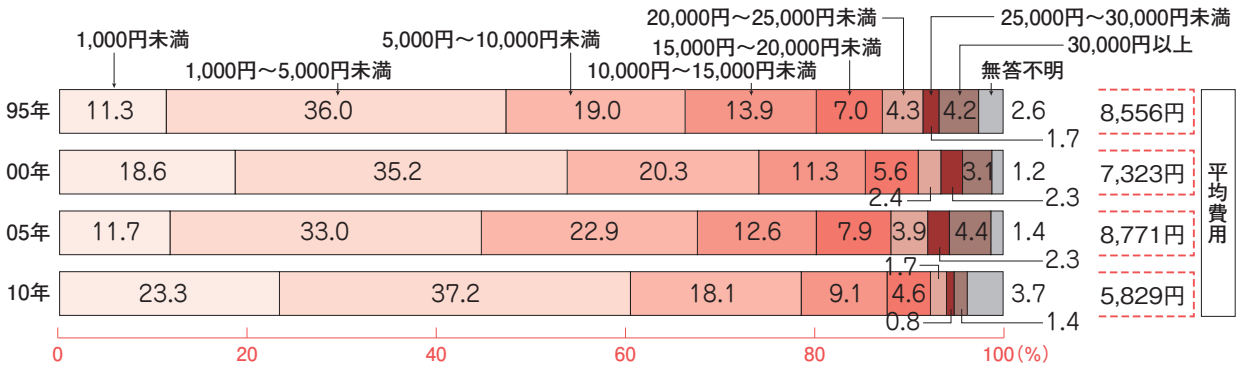
「四年制大学卒業まで」を期待する比率をみると、95年70.0%→00年61.8%→05年64.5%→10年66.7%となっており、5年前と比べて若干増加傾向にある(図2-3-1)。さらに子どもの性別でみると、「四年制大学卒業まで」を期待する比率は5年前と比べ、男子はほとんど変化がないのに対し、女子は増加している(図2-3-2)。また、留学希望についてたずねたところ、約4人に1人の母親が将来子どもを留学させたいと考えていた(図2-3-3)。また、留学時期としては「決まっていない」の次に「高校生のとき」と答えた比率が高かった(図表省略)。なお、留学の希望について子どもの性別による差はみられなかった(図表省略)。

## 一度増加した教育費の支出が、再び落ち込んでいる

教育費に10,000円以上支出している比率は、00年調査の24.7%から、05年調査では31.1%に増加したが、10年調査では17.6%と再び減少している。また、子どもの教育に「もっとお金をかけたいと思うか」についての意見は二分している。

**Q** 現在のお子様1人にかかる、1か月あたりの塾・通信教育・習い事・絵本・玩具等にかかる費用はいくらですか。(幼稚園・保育園で有料で習っているものは除きます)

図2-4-1 1人あたりの教育費(経年比較)

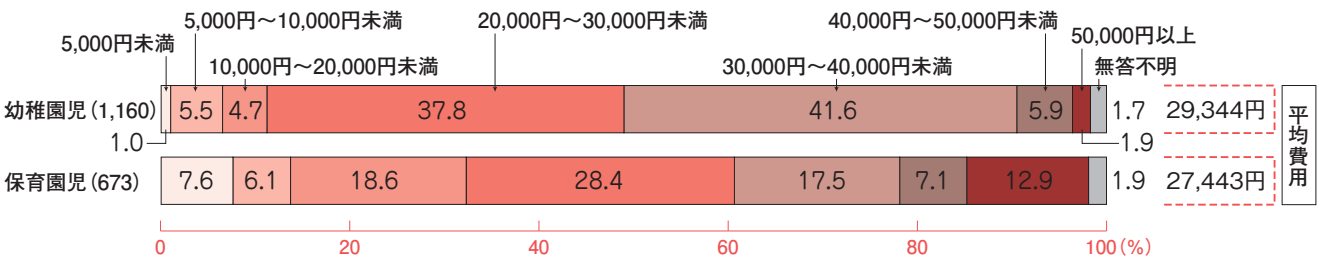


※平均費用は「1,000円未満」を500円、「1,000円～5,000円」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。

※95年、00年、05年調査は「幼稚園・保育園にかかる費用(就園補助等も含めて)を除いた、1か月あたりの塾・通信教育・習い事・絵本・玩具等にかかる費用を教えてください。」とたずねている(ただし、95年は、質問文に「(就園補助等も含めて)」と「絵本・玩具」の部分は含まない)。

**Q** 現在のお子様1人にかかる、1か月あたりの幼稚園・保育園にかかる費用はいくらですか。(保育料や、幼稚園・保育園で有料で習っている習い事の費用を含みます)

図2-4-2 園にかかる費用(就園状況別 10年)

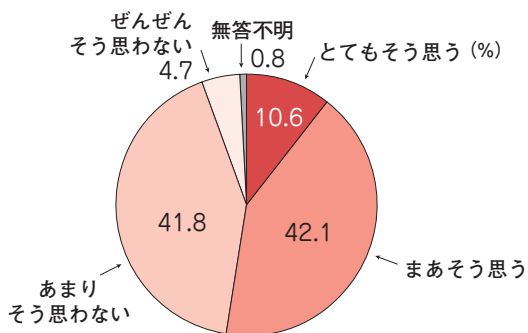


※子どもを園に通わせている人のみ回答。

※平均費用は「5,000円未満」を2,500円、「5,000円～10,000円」を7,500円、「50,000円以上」を55,000円のように置き換えて算出した。無答不明の人は分析から除外している。

**Q** もっとお子様の教育にお金をかけたいと思いますか。

図2-4-3 もっと教育にお金をかけたいか(10年)



※母親の回答のみ分析(2,839)。



10年調査は、教育費の平均が4回の調査のなかでもっとも低かった(図2-4-1)。00年調査も教育費を抑える傾向がみられたが、10年調査はそれをさらに下回っている。また、園にかかる費用は、幼稚園児では「2万円台」「3万円台」が約4割ずつであったが、保育園児ではばらつきがみられた(図2-4-2)。子どもの教育にもっとお金をかけたかをたずねると、「そう思う(とても+まあ)」と「そう思わない(あまり+ぜんぜん)」がともに4割～5割台であり、考え方が二分される結果となった(図2-4-3)。

# 3

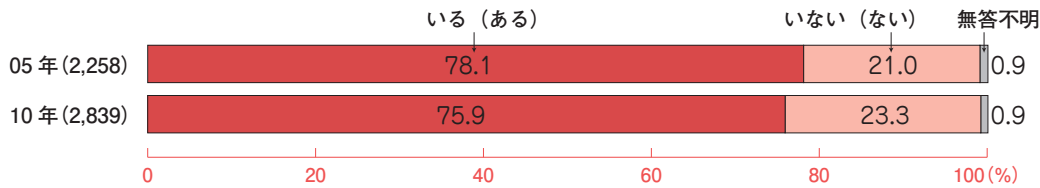
## 子育てサポート

### 母親が家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる父親が、5年前に比べて増加

家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人が「いる」という母親のうち、面倒を見てくれる人として「父親」をあげた比率は、5年前に比べて増加した。また、育児への父親の精神的サポートを感じる母親も、5年前に比べて、やや増加している。

**Q** あなたが家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人(機関・サービス)がいます(あります)か。通常、幼稚園・保育園にお子様を通わせている時間は除いてお答えください。

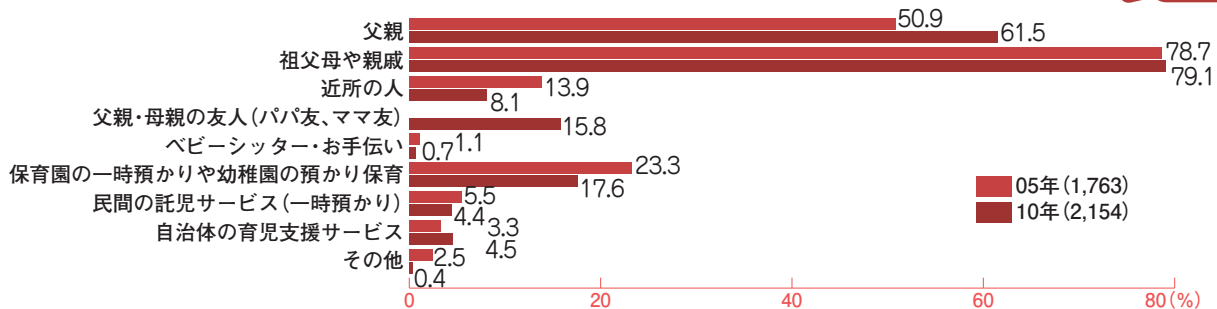
図3-1-1 子どもの面倒を見てくれる人(機関・サービス)の有無(経年比較)



※母親のみ回答。  
※05年調査は、「あなたが仕事以外で家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人(機関・サービス)がいます(あります)か」とたずねている。

**Q** 面倒を見てくれる人(機関・サービス)を教えてください。

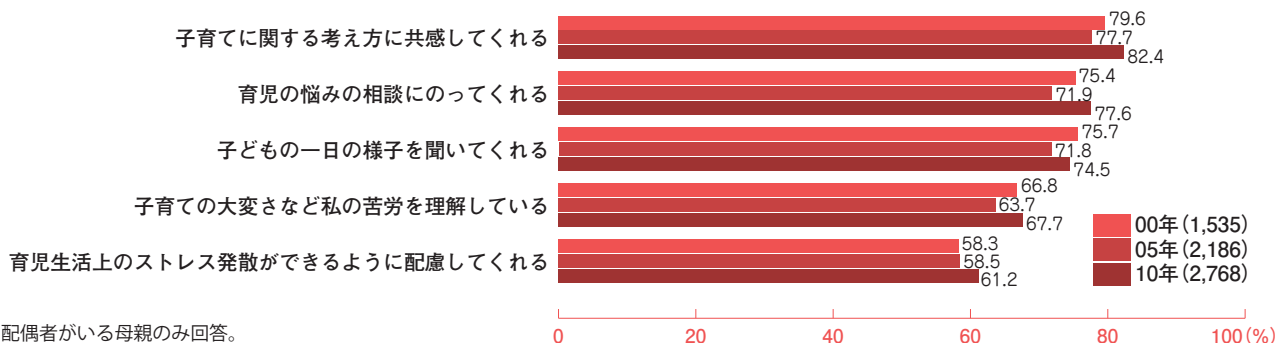
図3-1-2 面倒を見てくれる人(機関・サービス) (経年比較)



※複数回答。  
※母親のみ回答。子どもの面倒を見てくれる人(機関・サービス)が「いる(ある)」と回答した人のみ回答。  
※「父親・母親の友人(パパ友、ママ友)」は、10年調査のみの項目。

**Q** 父親に関して、あなたは次のことをどう思いますか。

図3-1-3 育児への父親の精神的サポート(経年比較)



※配偶者がいる母親のみ回答。  
※「とてもそう思う+まあそう思う」の%。

家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人(機関・サービス)が「いる(ある)」という母親は75.9%で、5年前とほとんど変わらない(図3-1-1)。しかし、面倒を見てくれる人として「父親」をあげた比率は、05年50.9%→10年61.5%と10.6ポイント増加した。一方、「保育園の一時預かりや幼稚園の預かり保育」は23.3%から17.6%へ減少した

(図3-1-2)。また、育児への父親の精神的サポートをみると、「育児の悩みの相談にのってくれる」(05年71.9%→10年77.6%)、「子育てに関する考え方に共感してくれる」(77.7%→82.4%)など、5年前と比べて全体的にやや増加傾向にある(図3-1-3)。

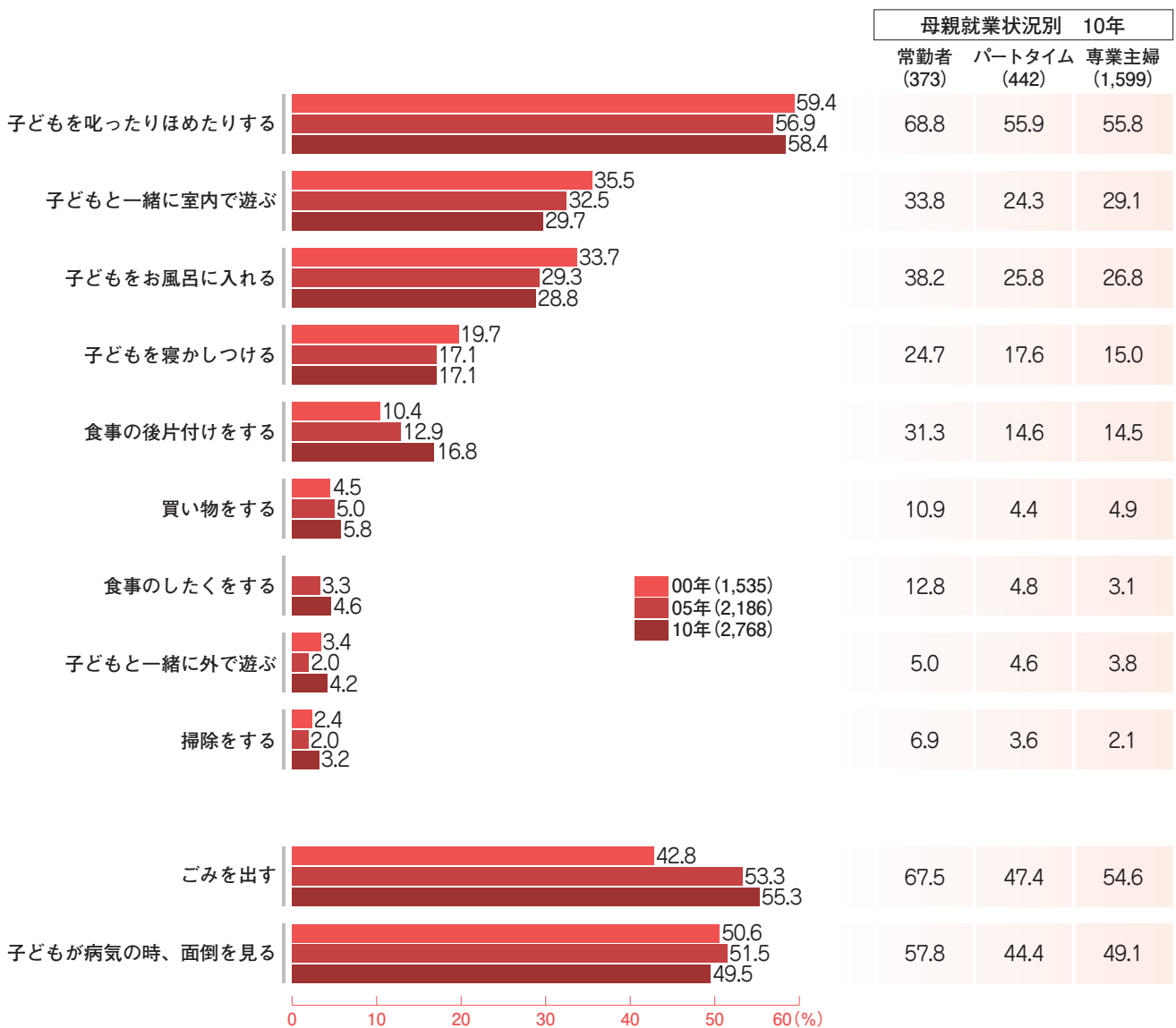
## 父親の家事や育児への日常的なかかわりに、あまり変化はみられない

父親の家事や育児への参加状況をみると、5年前と比べて、あまり変化はみられない。多くの母親からみて、父親が日常的に家事や育児にかかわるとい状況にはなっていないようだ。

**Q** 父親は次のことについて、どれくらいしていますか。



図3-2-1 父親の家事・育児への参加状況(経年比較)



※配偶者がいる母親のみ回答。

※「ほとんど毎日する+週に3~5回する」の%。「ごみを出す」「子どもが病気の時、面倒を見る」は、「いつもする+ときどきする」の%。

※00年調査では、「食事のしたくをする」はたずねていない。

「子どもをお風呂に入れる」などの育児や、「食事の後片付けをする」「買い物をする」などの家事について、父親がどれくらい行っているかを母親にたずねた。「ほとんど毎日する+週に3~5回する」の比率で、父親がどれくらい日常的に行っているかをみたところ、5年前と比べて、あまり変化はみられなかった。また、10年調査で、母親の就業

状況別に違いをみたところ、多くの項目において、母親が常勤者の場合のほうが、パートタイムや専業主婦よりも、父親が家事・育児を行っている比率は高い。母親の就業状況によって、父親の日常的な家事・育児へのかかわりは異なるようだ。

## 調査企画・分析メンバー

無藤 隆 (白梅学園大学教授)  
 一見 真理子 (国立教育政策研究所総括研究官)  
 佐藤 暁子 (東京家政大学准教授)  
 相馬 直子 (横浜国立大学大学院准教授)  
 荒牧 美佐子 (東京福祉大学専任講師)  
 韓 松花 (横浜国立大学大学院博士課程後期)

後藤 憲子 (ベネッセ次世代育成研究所主任研究員)  
 高岡 純子 (ベネッセ次世代育成研究所主任研究員)  
 朝永 昌孝 (ベネッセ次世代育成研究所研究員)  
 松本 留奈 (ベネッセ次世代育成研究所研究員)  
 田村 徳子 (ベネッセ次世代育成研究所研究員)  
 真田 美恵子 (ベネッセ次世代育成研究所研究員)

邵 勤風 (Benesse教育研究開発センター教育調査課長)  
 橋本 尚美 (Benesse教育研究開発センター研究員)  
 岡部 悟志 (Benesse教育研究開発センター研究員)

※所属・肩書きは、2010年8月時点のものです。

『第4回 幼児の生活アンケート報告書』は、  
2011年3月に刊行予定です

本調査の詳細な分析をまとめた『第4回 幼児の生活アンケート報告書』(180頁程度)を、2011年3月に刊行する予定です。

また、一部の調査項目に絞って、北京・上海・台北・ソウルの4都市においても「幼児の生活アンケート」を実施しました。東京(日本)を加えて、東アジアの5都市の幼児の生活実態などを把握できます。

この東アジア5都市における「幼児の生活アンケート」の結果については、2010年11月に「速報版」を刊行する予定です。



## ベネッセ次世代育成研究所とは

ベネッセ次世代育成研究所は、子どもや家族が「よく生きる」ことを支援するために、妊娠・出産、子育て、保育・幼児教育、子育て世代のワークライフバランスを研究領域として調査研究を行っています。また、その調査研究の成果を子育て世代を支える産科・小児科などの医療機関、保育・幼児教育の専門家の方々に発信し、よりよい子育て環境をつくる一助となることを目指しています。研究所の詳細については、ホームページをご覧ください。

本調査の速報版や報告書は、  
ベネッセ次世代育成研究所のホームページからダウンロードできます

ベネッセ次世代育成研究所が実施している各種調査の結果も、こちらからご覧いただけます

ベネッセ次世代育成研究所

検索

<http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/>

## 「第4回幼児の生活アンケート」速報版

発行日：2010年9月2日

発行人：新井 健一

編集人：後藤 憲子

発行所：㈱ベネッセコーポレーション ベネッセ次世代育成研究所

OTH000

©ベネッセ次世代育成研究所  
 ※無断転載を禁じます